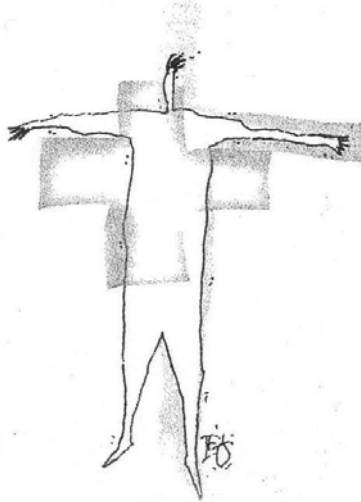


十字架の行進

第3編8章

自己否定に至るキリスト者は誰でも十字架を負う



十字架は治療薬としても働きます。苦しみの十字架は自分自身に対する盲目的な自己愛を私たちから取り除きます。自分の無能をさらによく悟らせるようにします。そして自分を信頼することを放棄させるのです。私たちの精神を全く変えてしまうのです。そして神を信頼するようにさせるのです。そこでようやく忍耐して辛抱する勇気が生まれます。忍耐は神と私たちが愛によって出会うことのできる場所です。

最近、戦争のあるところではどこでも赤い十字架の徽章を胸や頭につけてもうひとつ別の戦いをする人々がいます。国際赤十字社の団員たちです。「戦争の中でも愛を」と言う標語のもとに働いている彼らは第三の軍隊と呼ぶことができるかもしれませんが。また、各国赤十字社の連合体である赤十字社連盟(現在145カ国が参加している)は平時にも人々の健康増進と疾病予防、さまざまな苦痛を軽減させる活動のために目覚ましい働きをなしています。非宗教的な団体と言えますが、その十字架のこの行進はたいへんすばらしいものです。

赤十字社はJ. H. デュナン(スイスのジュネーヴに生まれ、厳格なカルヴァン派の信仰の伝統のなかで育てられた。父親は福祉孤児院の仕事に関わり、母親も福祉活動に熱心だったという。1859年、事業の請願のため、イタリア統一戦争に介入してオーストリアと戦っていたナポレオン3世に会いにいき、北イタリアでソルフェリーノの戦いに遭遇した)の著書「ソルフェリーノの思い出」(1863年)の発刊が創立の契機になりましたが、その本はクリミア戦争(1853~1856年)当時のF. ナイチンゲールの目覚ましい救護活動に刺激されたものでした。イスラム圏の各国では赤十字の徽章に換えて赤新月を用い、名前も「赤新月社」と呼ばれています。しかし、赤新月ではなく十字架でなければ「戦争の中でも愛を」という標語をうまく表すことができないのではないでしょうか。全世界に天の愛を实践する働きは赤新月ではなく十字架の行進がすることだからです。

第1節 キリストの弟子は自分たちの師と同じように自分の十字架を負う

あなたはできれば平安で豊かな生活をしたいと願っていますか。そして苦しみや貧しさ、災難はどんなことがあっても避けたいと思っていますか。それが私たちの肉の本性から生まれる願い

です。しかし、キリスト者になったならば決心しなければなりません。たくさんの苦難や恥辱と災難がその生涯に襲ってくる覚悟をしなければならないのです。なぜでしょう。十字架を負わなければならないからです。私たちの十字架は黄金でできているわけではありません。それは血と汗と苦痛から出るうめきが刻み込まれた苦難の柱でできているのです。それが私たちの師が負って行かれたものです。私たちはキリストの弟子ではありませんか。それならば当然、師の後に従って十字架を負わなければならないのです。そして今、世界のあちらこちらでキリストの後に従う十字架の行進が続けられているのです（マタイ 16：24）。

私たちが十字架を負わなければならない二つの理由があります。ひとつはすでに語ってきたように私たちの師であり、模範であるキリストが十字架を負われたからです（ローマ 8:29；ヘブライ 5:8）。ですから私たちも十字架を負って苦難を受けるならばその師に似る者とされるのです。神はご自分が愛し、お喜びになられたひとり子キリストに十字架を負わされました（マタイ 3:17）。それは何を意味しているのでしょうか。神の養子とされた私たちにも例外なく十字架を負うようになることを意味しているのです。

そして第二に、私たちはその師の足元にも及ばない弟子たちであるからです。私たちは師に比べてあまりにも弱く、邪悪な者たちです。イエスが十字架を負われた理由の中のひとつは忍耐と従順を証明するためでした。しかし、私たちは十字架がなければ傲慢となり、神から離れ腐敗してしまうのです。自分の力では一時たりとも忍耐や従順を維持することができないのです。

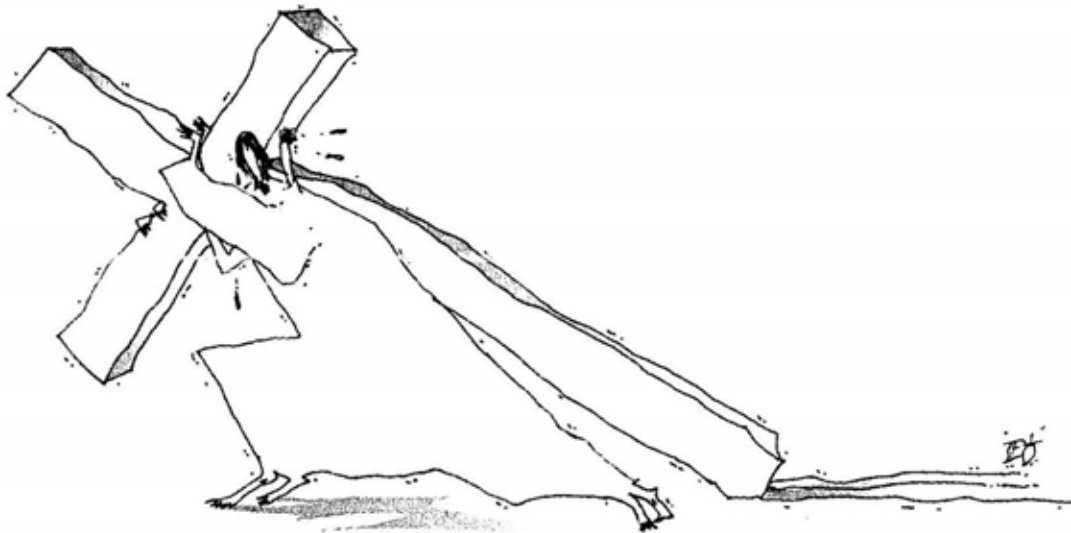
あのすばらしい信仰の先輩ダビデでさえすぐに自己過信に陥りました。しかし、すぐに主の怒りを受けた彼はそれ悟り悔い改めています（詩 30：7～8）。神が十字架の苦しみを与えるならば、それに降伏しない者はありません。神の力に絶えることができる者は一人もいないのです。結局、十字架の苦しみによって私たちは自分への信頼を放棄させられ、謙遜な者とされるのです。この二つの理由によって私たちは十字架を負わなければならないのです。そして神は私たちの一生をさまざまな災難、戦争、失敗、貧困、別離、そして疾病で苦しめるのです。しかし、その道を行くことこそが私たちにとってもっともふさわしいことであることを心に留めましょう。

第2節 十字架は私たちにとってよき薬です。

薬の中には予防薬があり、治療薬があり、また栄養を補助して体力を回復させる薬もあります。十字架はそのすべての薬の役目をはたしています。まず十字架は予防薬として働きます。私たちはあまりにも罪に腐敗していて、少しの間でもそのままにすれば謙遜のくびきから逃れようとしてしまうのです。そして道を外れ、自分の思いのままに歩もうとして、ついには自分を見失ってしまうことにもなります。そのように暴れまわる肉の欲望を制御する予防薬こそが十字架なのです。

天の名医がよく知っている事実がひとつあります。それは私たちすべてが例外なく病人であるということです。どのような病でしょうか。狂気の病です。そしてときどき発作を起こします。また少しでも発作がおさまると自分はすっかりよくなったと騒ぎます（申命記 32:15）。その病は十字架の薬を飲み続けなければいつでも再発するのです。

また十字架は治療薬としても働きます。苦しみの十字架は自分自身に対する盲目的な自己愛を私たちから取り除きます。自分の無能をさらによく悟らせるようにします。そして自分を信頼す



ることを放棄させるのです。私たちの精神を全く変えてしまうのです。そして神を信頼するようにさせるのです。そこでようやく忍耐して辛抱する勇気が生まれます。忍耐は神と私たちが愛によって出会うことのできる場所です。忍耐と言う垣根の中で私たちは神の真実と愛と力を体験するようにされ、その程度に従って希望がますます固くされるのです（ローマ5:3,4）。これはどんなに偉大な治療薬でしょうか。

ですから私たちは「ああ、これが私の十字架か」と悟ったならば、すぐに今までの自分の罪を思い出す必要があります。そうすれば自分が懲らしめを受けた理由を必ず発見することができます。その理由のない人は一人も存在しません。誤りを治療しなければなりません。しかし、父の懲らしめは私たちの罪だけを取り上げて終わるものではありません。もう一步先に進んで私たちがこの世と共に裁きを受けることがないようにさせるのです（コリント第一 11:32）。そして十字架の苦難は私たちの救いを完全なものとしようとする父が打たれる愛の鞭と言えるのです（箴言 3:11,12；ヘブライ 12:8）。

また十字架は栄養を補助する薬です。栄養補助薬は体質をさらに強化させるための薬です。十字架のために私たちが受ける利益の中で代表的なものが二つあります。一つは忍耐であり、もう一つは従順です。すでに私たちが受けた賜物の中で最も大きな賜物がこの忍耐と従順です。十字架は地中に埋められてしまったタラントと同じようになってしまうところだった忍耐と従順を私たちの心の中から掘り出してあらわにしてしてくれるのです（ローマ5:3,4；ヘブライ 5:8；ペトロ第一 1:7）。

私たちはあまりにも悪く、苦難がなければとても忍耐と従順を学ぶことはできません。それでは信じていない人々と信仰者との違いはどこにあるのでしょうか。信じていない人々は懲らしめを受けるとさらに悪くなって、悪の奴隷となり、さらに罪を犯して行きます。しかし、自由を与えられた神の子供である信仰者たちはすぐに悔い改めます。そして父の御心を探り求め、従順に従おうとします。

第3節 十字架は軍人の戦いのように私たちにとっての名誉です。

自分の弱点や罪とは関係なく十字架を負わなければならない場合があります。義のために迫害を受けて犠牲を払う場合です。ちょうど軍人が国のために苦難と自己犠牲を払うのと同じです（黙示 14:12）、命や財産、名誉を失うこともあります。しかしそのすべてのことは祝福なのです（マタイ 5:10）。私たちの主は生涯を通してそのことを私たちに示してくださいました。ですから私たちもどんなにつらい災難であったとしてもそのことについて世の人々と違った評価をしなければなりません。主が大切なものと考えられたものを私たちは決して粗末に扱ってはいけません。

むしろ自分がキリストのために侮辱されることにふさわしい者とされたことを感謝し、喜ばなければならないのです（使徒 5:41）。私たちが義のために家族を失えば主は私たちに真の家族を与えてくださいます。もし財産を失うならば天に宝を積むことになり、この世でのつかの間の名誉を失ったとしても永遠の榮譽を回復させてくださいます。このように十字架は私たちが本当に慕い求めなければならないものなのです（テモテ第一 4:10）。



第4節 十字架はもちろん苦しいものですが、喜びと感謝となります。

十字架は苦しみです。苦しくなければ忍耐の必要はありません。忍耐がなければそこでどんな益が生まれるでしょうか。十字架を堅持することはストアの哲学者たちの言葉のように無感覚な状態になることではありません。石ころのように何も感じない状態になることではないのです。彼らは偉大なる魂を持つ人にはそれが可能だと主張します。しかし、そのようなことは人間の世には存在しえない幻にすぎません。暇に任せて言葉を作り出す以外に働くことがない人がそのように語るのです。

私たちの主も苦難と悲しみのとげで刺されるたびに苦しみ、悲しみ、涙を流されました（ヨハネ 16:20；マタイ 5:4；ルカ 22:44；マタイ 26:37,38；マルコ 14:33）。私たちはなおさらそうなのです。苦しみのとげが刺されれば流れる涙を止めることはできません。心の底からこみ上げるうめきを押さえることができません。私たちの感情はいつも生きているのです。十字架の上は戦場です。そこは現実の苦しみと私たちの忍耐が衝突する戦いの場所なのです。しかし、私たちが自分自身の内のすべての反抗する感情と意志を押さえ込んで、神の命令通りに行おうとするためには、私たちは十字架の戦いで必ず勝利しなければなりません。

十字架がどんなに苦しくても忍耐しなければならない理由をもう一度整理してみましよう。苦難を受けたとき私たちがそれを「甘んじ受けなければならないのは、それが避けることができない

いたためである(それは必然であるから逃れることができない)」と世の人々が語っていることは真実ではありません。すべての十字架は神の摂理に基づくものだと思えるのです。神は公義に反することは行われぬ方です。事実、病の十字架さえも私たちが犯したすべての罪に比べれば、あまりにも軽いものでしかありません。神が私たちの肉が本性通りに活動出来ないように制御され、謙遜と従順のくびきを負う習慣が生まれるようにさせることは神の公義による働きなのです。

第二に私たちが愛される神を受け入れるためです。すべての十字架は私たちの救いに助けとなり、益となります。これを信じればたとえ十字架を負って苦しんだとしても霊的な喜びで心は満たされるようになります。そしてそこに感謝が生まれるのです。このように私たちの十字架の苦しみは霊的な知恵と喜びで制御される必要があります。そうすれば私たちは感謝と喜びで十字架を負って行くことができるようになるのです(ペトロ第一 2:19)。

結びの言葉

個人的にイエスを信じることはその人生で十字架を負って歩むことです。そして教会が世を制服するという事は十字架の行進をするということです。十字架のないキリスト者の生活はありません。キリスト者は天国への十字架の行進に加わる軍人なのです。そして今でも世界のあらゆる場所での十字架の行進が続けられているのです。